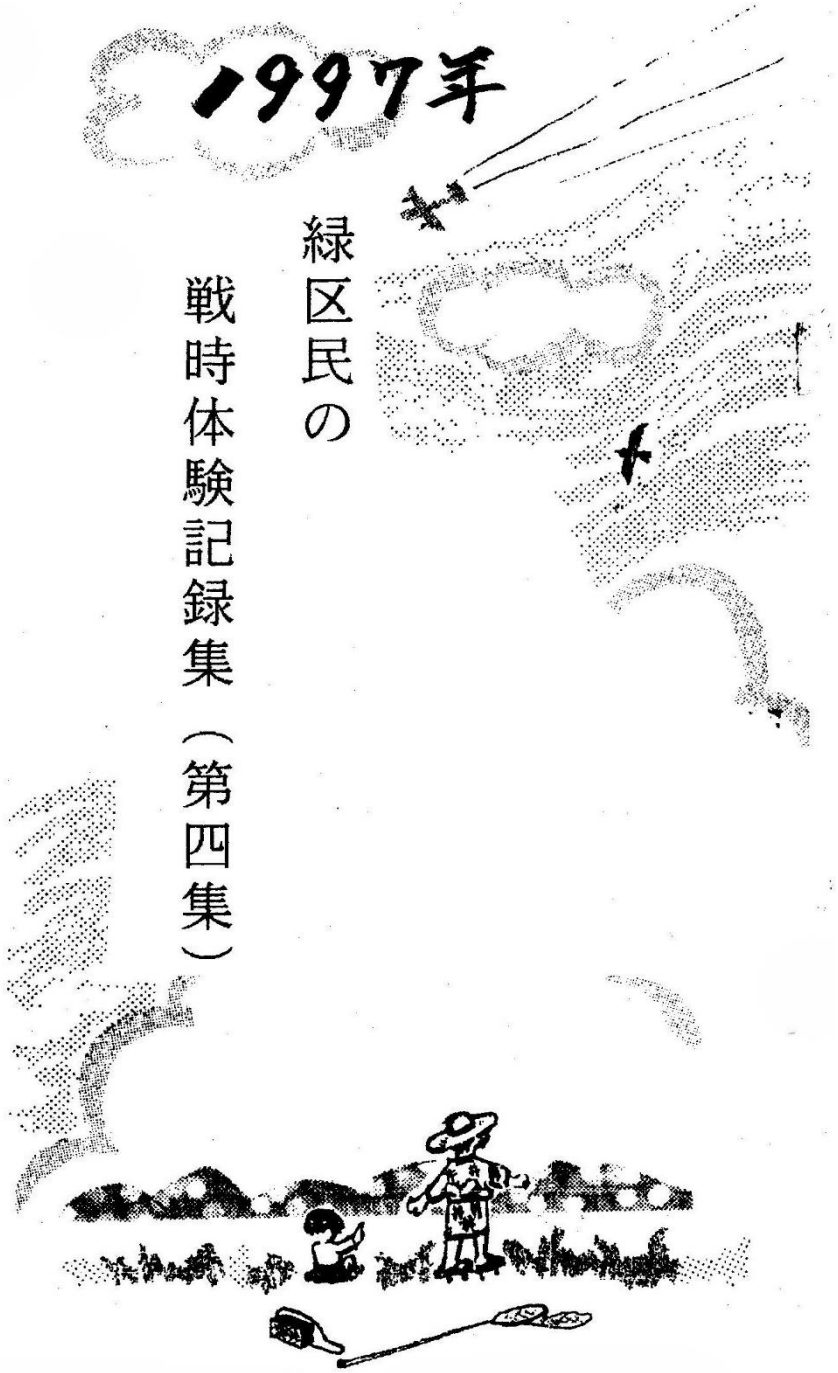



# 緑区民の戦時体験記録集（第四集）

第九回戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

## 目次

「日本で一番長い日」・・・

《発行の辞》

地域で共に生きる方々の『戦時体験記録集』も、第四集を発行することができました。ご家庭で、ご家族でお読みの上、話題として下されば、実行委員一同、望外の喜びと存じます。

思えば、はじめて「記録集」づくりに取り組んだ年に、本「記録集」の表題を「戦争」とするのか「戦時」とするのかの一点のみで当時の実行委員会の中でも、ずいぶん慎重に議論したものでした。「『戦争』体験記録集では、いわゆる『武勇伝』の方を強くイメージされるのではないか？」「『戦争体験を語り継ぐ集い』は、わたしたちの歴史の中の凄惨な出来事を繰り返さないために行うものではないか？」「おろかな選択を次の世代が二度としないようにするためには、どういう『学び』が必要か？」などなど、折り重なる意見の結果、「戦闘の記録」ではなく、戦地に送りだしたいわゆる「銃後の守り」もいかに



悲惨なものであったのかという事実に「重点」を置いて編集を行っていく想いを込めて、あえて「戦時」ということばを選んだものでした。「三号までは勢いで刊行できる」という世評を乗り越えた、本「記録集」もそうした想いを十二分に引き継いだものと言えましょう。

今年は、日本国憲法が施行されて五十年目の節目の年です。わたしたちが世界に誇るいわゆる「平和憲法」と共に歩んだ半世紀はどのようなものだったのでしょうか？いうまでもなく、「戦闘」のない、「平和」のもたらしてくれる「豊かさ」を積み上げてきた暮らしだったのでしょう。わたしたちの地域がさらに「誰でもが安心して、生きいきと暮らせる」生活の砦になっていくことを願って、この「記録集」をお届します。

一九九七年七月一九日

第九回戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会一同

# 日本で一番長い日

神野　正人

昭和二十年八月十五日正午、広場へ集合するために工場から外にでた。厳しい暑さが続いて、夏の陽射しが体を刺してくる。

先輩の新聞記者が、ソ連参戦、広島、長崎への新型爆弾投下で、ポツダム宣言を近く受諾し、戦争は終ると告げた夜も、米軍機は頭上に飛来していた。宣言の写しを渡されたが半信半疑であった。

「軍国主義的指導勢力の除去」

「戦争犯罪人の厳罰」

「連合国による占領」

「日本領土の局限」



「日本の徹底的民主化」

軍人が、果してこの条件を納得するとは、考えられなかったからだ。

現実には、工場の疎開、相次ぐ連日の空襲、沖縄放棄がなにより絶望的に思えた。決戦・玉砕・焦土戦術、新聞は報じ続けているが、本土決戦になれば、秋まで生きのびられそうにない。

今日、正午の重大放送は、本土決戦か、降伏か、どちらかの決断に違いないと考えていた。行列の最後尾へ並んだ時、新聞が「国体護持」を告げだしたことに気付いた。降伏の言葉が頭に浮かび、体が硬直して行くのが判った。

「将運のおもむく所たえ難きをたえ、忍び難きを忍び、もって万世のために大平を開かむと欲す」

ラジオからの、雑音まじりの不明瞭で、甲高い言葉を、正確に理解した人は多くないはずである。こうして戦争は終った。かたずをのんでいた広場の群衆は、声もなくその場に立ち尽くして、軍人たちの異常な固さが印象に残ってい

る。いつとはなく群衆は散りだし、女学生が数人ずつ抱き合い、泣き声が展がり、そんな姿に、敗戦国民と言う得体のない恐怖が、私の中を駆け抜けた。

強制的に工場へ徴用された人たちが早くも帰りだした。もんぺ・防空ずきん・国民服・戦闘帽・下駄と暗い服装の列のなかに、幼いとも思える少女の顔には胸が痛んだ。

こんな光景は、ニュース写真でみた、他国の難民のはずであった。それが眼の前に存在している。私にとっては以来、挫折のイメージとして、この光景が焼付いてしまっている。

中学生が、教師に引率され整然と行進して行く。教授が、

「戦争は終った。これから日本を支えるのは諸君である。十月には出校するように」

去って行く後姿に、昨日まで、悠久の大義に生きる、神国日本と、鼓舞した言葉が重なる。空襲で半ば焼失した学校に戻って、価値観が全く逆になった今、



何を学ぶのか・・・・・・。

憲兵や警察官に、非国民と何度も殴られたが、青春と言う時を、朴歯（ほうば）の高下駄で守っていた、私たちのグループはだらだらと工場の門をでた。工場地帯を走る市内電車はすでに超満員で、待つ気にもならず、舟方を経て日比野へと、無言で歩く人たちの間を縫うようにして、朴歯の音を鳴らしながら歩いた。

思いもかけない平和に安堵を覚えたが、荒廃した現実に戸惑う私に、校歌を歌いだした吉原の声が響いてきた。北野・田中・安藤・戸田が、呆然と見送る人たちを横に、蛮声を張り上げてーーー、

私たちの青春は一つしかなかった。

「ヤマユカバ、クサムスカバネ

ウミユカバ、ミズクカバネ　」

国のために、死ぬことこそ最善の生きる道であった。それが消え去り、死に

至る思想の絶望的な否定は、精一杯の蛮声をだすしかなかった。特に、国粋論者の吉原には、耐え難い苦悩に違いない。

（後日、吉原は宮城前にて、割腹して果てた）

一軒だけ焼け残った下宿に帰って、二階にあがり、電灯や窓際の遮蔽幕（シャヘイマク）を引き千切って窓をあけた。戦場ではなかったのに見渡す限り、そこには赤茶けた焼け跡だけの風景だった。半分地下に埋った堀立小屋が意外に多いのに驚く。

大豆に、どんぐりと甘藷の粉の団子を食べて、想像をこえた量の焼夷弾が落下するなか、夜も眠れず、西に東に、逃げながら生きのびてきた。今日も真夏の午後の太陽は容赦なく、焼け跡を照りつけて、天心まで澄みきった青空は変わりないのに、何もかも変わってしまった。

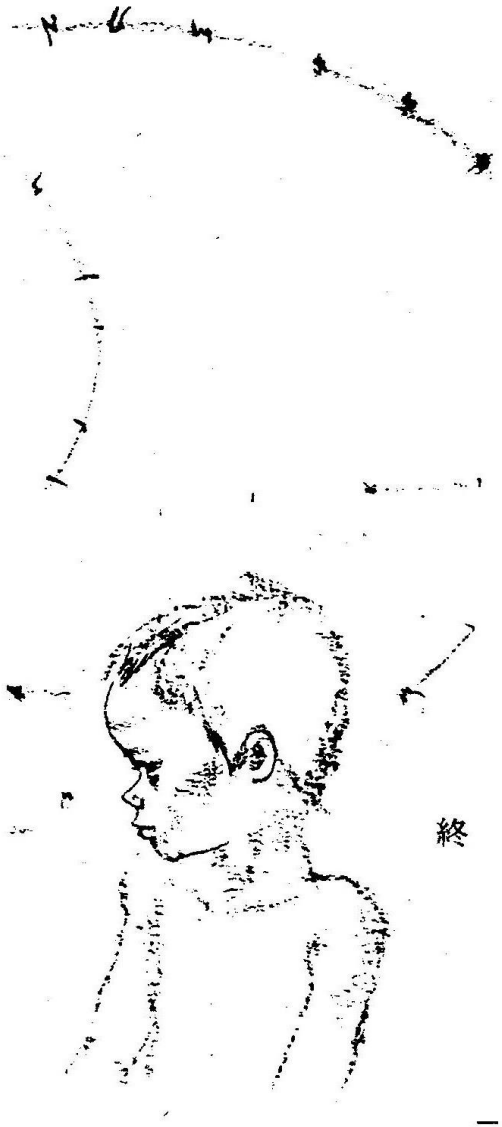
まぶしい陽のなかを、無数に赤トンボが舞い狂って、白日夢のように眺めていた。



夜、ポツダム宣言を改めて読んだ。自由とは、民主化とは、何も判らない五里霧中のなか、私の深層を埋めて行くのは、焼死・爆死・戦死・戦病死と、学生として学んでいたはずの、十数名の友の結末であった。

窓の外には、昨夜までの暗闇に、地中から湧くように灯が溢れ、音楽さえ流れてくる。

書店の列に並び、せめてと文庫本を持って征った、浜中の笑顔を想い、私は声をあげて泣いた。



終

# 一女学生の戦争体験

増原　美枝子

憧れの女学校に入学出来、勉強に運動にと楽しい学校生活も三年生迄であった。四年生になると授業もなくなり学徒動員として三菱航空機工場で働く事となった。航空機の部品を萬力で挟んでヤスリで削り、焼入れの工場へ持って行く仕事であった。私達が携わった部品を使って作られた零戦に女学校名を書いたプレートを付けて貰った時は、本当に感激した。

モンペをはき防空頭布を背負って工場へ通い一生懸命御国の為にと働いている時、昭和十九年十一月七日に東南海地震に見舞われ、工場がぐらぐら揺れ、とても恐ろしく生きた心地がしなかった。三菱の大江工場から金山の家迄市電がストップしてしまったので歩いて帰ったが途中あちこちで家が倒壊していた。



それからB二十九による空襲もはげしくなり私達の働いていた工場は疎開する事になり北区の紡績工場へ移った。

大江工場に残っていた他の組の学友達は、十二月十八日に大空襲に遭い、防空壕に直撃弾を受け先生一名学友十二名が尊い命を失った。名古屋のシンボル名古屋城天守閣も焼失した。私達が現在有るのはこの人達や多くの戦死された方々の犠牲の上にあると思うとたまらない気がする。

五年制の学校は四年で卒業となり私は国民学校へ奉職する事になったが、大半の学友はそのまま残って工場で働いた。

昭和二十年三月末、本来ならば講堂で行う卒業式も焼け落ちた校舎を目の前にして行われ、校歌の後には「海ゆかば」を合唱した。縁故疎開している者、又亡くなった方等で、生徒数は随分少なかったと記憶している。

私は学徒動員中に女子師範学校で短期の教育をうけ卒業と同時に教員となった。県庁で辞令を受け赴任先の国民学校へ行くも児童は集団疎開で一人もいな

かった。疎開先は愛知県中島郡祖父江町にある善光寺であった。

寺の庫裡に児童と起居を共にし寮母兼先生となり掃除、洗濯をし又買い出しにリヤカーを引いて村の農家を廻り南瓜や西瓜を分けて貰った。食事も朝は箸の立たないお粥、昼はジャガイモ丈、夜は雑炊、炊とんと今から考えると、よく子ども達も耐えたものと思う。

又その間には児童と田植をし蛭に吸い付かれ中々取れず蛭がまるまるふくらんだ事も忘れられない思い出である。

夜空襲警報がなると急いで子ども達を起こし皆寺の本堂に集った。敵機が来襲し遙か名古屋の空が真っ赤に染まり、皆夫々に自分の家の人達の事を思いやった。又、蚤やしらみに悩まされ、児童も先生も頭にＤＤＴをまき水銀軟膏などを塗ったが、中々根絶出来ず閉口した。

昭和二十年八月十五日敵機の散布したビラによって敗戦を知った。校長がそれを読み上げこれから先どの様になるのかと不安になった。帰るにも校舎は焼



かれ終戦後三カ月位はお寺にいたと思う。

港区の東築地に三菱の寮がやけ残っていて、そこで国民学校の授業を再開したのである。

真珠湾攻撃から始まった三年八カ月の戦、その終末期としての昭和十九年、二十年は、日本人にとっては本当に苛酷な日々であった。

私の兄三人は皆兵隊となり、長兄はサイパンで戦死した。

終

# 戦禍に埋もれた青春

加藤　すみゑ

スーパーに入ると、あらゆる商品が所狭しと並んでいる。

正月しか食べなかった餅、祝日用の赤飯、祭日に食べた寿司、肉、刺身、今では何でも直ぐ口に入る。入浴も望む時にかなうし、衣服は毎日着替えられる。夜には電気はこうこうと点り、安心して眠る事が出来る。

自分の考えや、希望する事が自由に主張出来るし、将来の進路も自分自身で選定出来る。何と平和な裕福な毎日であることか。

昭和十六年十二月八日。日本はアメリカとの戦争に突入。当時十六歳であった。夢と希望で胸一杯の新入社員で、英文タイピストとして貿易商社に就職してから、八カ月経っていた。

男性社員は次々と戦地に応召し、女性社員も職を変え去っていったが、私は、勤務後ＹＭＣＡの夜学に通って英語を勉強していた。外国人教師も相応にいて、英・仏・中国語等学ぶ学生達が大勢いた。英語で歌ったり、弁論大会等もあって楽しかった。クリスマスには英語劇を上演するため、練習していたが、第二次世界大戦（当時は大東亜戦争と呼ばれていた）勃発のため中止となり、ＹＭＣＡもついに閉鎖されてしまった。

一方、商社に在籍しながら、東海軍需監理部（当時愛知県庁の六階）に徴用社員として派遣された。そこには陸・海軍の士官学校、兵学校を卒業した将校達が多く、課長は中佐（階級）であった。海軍は紺、陸軍はカーキー色（国防色と言われた）のマントを翻し、サーベルを腰に提げ、長靴を履いたさっ爽たる姿に、あこがれさえ抱いていた。

段々、空襲も激しくなり、通勤途中とか、勤務中に空襲警報のサイレンが鳴

り、防空壕へ避難した。夏は蚊に刺され、雪の夜は凍えながら防空頭布を被って、暗い壕内に身をひそめ合った。愛知県庁からは、名古屋城の外堀に造られていた防空壕へ何度も逃げた。上空ではＢ２９爆撃機（米軍機）の下の方に、日本軍の放った高射砲の白い煙が、ポッカリ、ポッカリと浮かんでいた。何とも間の抜けた光景と、Ｂ２９特有のあの重い爆音は、五十年以上経た今でも鮮明に脳裏に焼き付いている。

それと同時に、今でも浮かび上がって来る悪夢の様な出来事。それは名古屋が空襲で焼野原になった夜である。当時、瑞穂区に住んでいたが、其の夜西の方から逃げて来た人達と一緒に吾が家の壕内にいた時、数多くの照明弾とか、焼夷弾が落ちてきた。まるで花火の様な光と激しい音の連続で、膝がガクガクふるえて止まらなかった。父だけ、家に残り家族は大勢の人達と、ぬれたタオルで口を覆いながら東方の丘へ逃げた。（現在の瑞穂運動場の辺りである。）真っ赤に染まった名古屋の空を、まんじりともせず、皆、呆然と見上げていた。



後日、熱田空襲と言い伝えられた。

翌日、名古屋市街は上前津から四方が見渡せる焦土と変わり果てていた。幸いにも、父と吾が家は無事であったが、仲良しの同僚一家は壕内で直撃を受け、一家全滅していた。

やがて、広島、長崎に原爆が落とされ、大惨事となったのである。終戦となり、悪夢は終わった。海軍に志願して征った彼も永久に帰らぬ人となった。昭和二十年八月十五日。二十歳の時である。我が青春は戦争に始まり、戦火の中に埋もれてしまった。

戦後は、婦女暴行等のデマにあわてふためき、食糧難、物資不足で皆かんなん辛苦をなめたのである。

農家の我が家も、供出米の割当があり、米飯は口に入らず、麦をパンや麺と交換していた。芋類だけ、豆類だけの食事であったり、少しの米粒と、小麦粉

で作った団子の入ったすいとん汁で過ごしていた。そんな中、乾燥したそら豆、大豆を炒ったおやつは本当に美味しかった。食糧不足を闇で補う為、止むを得ず法を犯す者もでた。後日、恩師（壮年男性）が栄養失調で亡くなられた事も知った。衣料品や糸等も点数で配給された。夜は、定時には消灯され、ロウソクの灯りで読書とか、編物等をしていた。入浴は毎日出来ず、遠方まで出掛けたが、湯は湯船の半分位しか無くて、人間が、まるで芋を洗う様な状態にされていた。思い出すと情けない。

戦時中は、国家権力からの、情報一つ考えることも、反抗する事も不可能であった。

戦後は、それ迄の価値観が百八十度転換され、民主主義に移行していったが、空虚な、無味乾燥な時代が流れていった。

平和になって、五十年余りが経つ。国民の努力で、何もかも夢の様な豊かな



社会が実現したのである。一方で、心身共に深い傷跡を持つ数多くの人達がいる。又、世界のどこかで今も戦火が絶えない。

何とも嘆かわしい限りである。

美しい地球を守る為、平和な世界を築く為に、過去の戦争体験を教訓として、活かしたい。昔は「老骨に鞭打って」とか言われたが、今は、老体でも生き生きと、学習出来る。老後をただ楽しむだけではなく、世界に広く眼を向け、若い世代に助言出来る有為な熟年者であるために、自己を鍛錬し、勉強し続けよう。

そうする事が、失われた青春を取り戻す事になるのではないか。

断言出来る。懸命に生きる今こそ、青春そのものである、と。

# 学徒義勇隊に参加して

近藤　釼二

終戦も間近かな昭和二十年七月、沖縄の米軍上陸の次はいよいよ本土決戦かと、ささやかれ緊張は一段と高まり空襲は毎日の様に繰返えされていた頃、軍需工場への学徒動員も二年目、当時私達は旧制中学四年生で神宮前の大同製鋼熱田工場で働いていた。

ある日、担任の先生より「この東海地区に学徒義勇隊なるものが結成され、各学校より選抜された幹部生徒が、陸軍の演習場で戦闘訓練を受ける様にと命令されている。本校からは君が選ばれたので参加する様に」と言われた。

二日後と思いますが指定された場所へ集合した各学校約百名程の生徒と共に、三重県菰野町にある陸軍菰野演習場へ行った。学徒義勇隊員としての入隊である。



そもそも学徒義勇隊なるものとは、（全国的に見て特に東海地区だけと聞いていますが、）今迄、軍需工場への労働力であった学徒を、軍部が本土決戦にそなえて戦闘要員として、動員出来る体制としてつくられたものであり、その為の訓練であったと思われます。

すでに沖縄戦では軍及び学生、民間人まで巻き込んだ一大決戦が行われ、学徒隊やひめゆり部隊までが戦場で勇敢に戦い多くの犠牲をはらい、若い命を散らせたのです。

それは今も語り継がれており、健児の塔、ひめゆりの塔として祭られております。

さていよいよ訓練開始し、隊長（陸軍中尉）外、指導員五名程（下士官）がおり、三班に分けられ、以後二週間、朝早くから夜遅くまでびっしりと、しぼられた。

訓練は主として迫り来る敵戦車に対して、爆薬を背負って肉薄し、戦車の下へ突っ込み爆発させる、いわゆる一人必殺の特攻攻撃である。

一人一人が「タコツボ」と言われた一人用の穴に入り敵戦車が近づくと、その穴より飛び出して爆薬を背負った人間が確実に戦車の下へ突っ込み破壊するのです。

使用した爆薬はやや黄色くて当時の洗濯石鹸によく似た形をしているところから石鹸爆弾又は黄色爆弾と呼ばれていて、大きさは今の中学生が持つカバン程のものだった。

それは戦車も直撃をうけると相当破壊する威力があると聞いておりました。

この様なやりかたは、正に人間爆弾で人間も弾と同じ消耗品であると考えられており、訓練は毎日毎日続いた。

実弾射撃もやりました。小銃、機関銃も撃ったし手りゅう弾も投げた。手りゅう弾は「ヒモ」を引いてから一、二、三の呼吸で投げるのだが、初めてで、



なかなかうまくいかず、投げるにも遠くへ投げられなく、すぐ近くで爆発したり、投げるタイミングが遅くなると手元で爆発する危険があり、その様な時は大きな声でどなられました。

なにしろ中学四年生と言っても身体も一人前の兵隊の様にいかず、小銃をもっての訓練などは銃が重くて動きが悪く、その都度どなり声が飛んでくるわ、それのやり直しが何回となく繰り返されるわで、誠にきつい訓練でした。

隊長より「君達は選ばれた幹部生徒だ。戦闘要員として敵が近づいたら一命を投げ出して勇敢に戦うことが君達の使命である」と毎日の様に教育され、それを何んの疑いも持たず、各学校より選抜された学徒幹部であるとの自負から一生懸命頑張った次第です。

学生は本当に純真な心でした。言われるまま、命令されるまま、訓練を重ねました。

いかに戦局が末期とは言え優勢な米軍の前に軍部は兵隊や学徒動員を弾のか

わりと考え、戦場へ送り出そうとした事は恐ろしい事です。

八月七日朝、隊長より「昨日六日、広島に於て米軍は新型爆弾を、空より投下し多くの広島市民が死傷した」との情報があった。「戦局は益々重大な時を迎えているので君達は一層頑張って、訓練に励む様に。」との訓示があった。

広島への原爆投下だったのです。続いて八月十五日には終戦を迎える事になるのです。

以来五十有余年、日本は平和な暮らしが続いております。戦争のないことが如何に有難いことか、つくづくかみしめているところです。

重ねて世界がいつまでも平和であります様願わずにはおれません。

## 戦中・戦後の暮らし

波止　文雄

開戦の知らせを告げる「大本営発表」を聞いたのは、国民学校（現在の小学校）四年生の時だった。子どもなりに、「何か大変な事が起こった」というような気がした。

当時、現在の生活とは比較にならぬが、まだ戦争の影響はそれほどなかった。（日中戦争は四年前から始まっていた）

それ以後急速に軍国主義一辺倒の世の中となり「欲しがりません勝つ迄は」のスローガンのもと耐乏生活へと変わっていった。

当時、鳴海町神明に居住していたが、現在の六田・曽根・平部あたりは、まだ水田で初夏には蛙の鳴き声、秋には黄金色の波を打つ静かな風景であった。

中学入学の頃より次第に戦争が激化し、戦時の苦しみが身近に及ぶようになった。

我々の世代は、兵役につくことは無かったが、一年の二学期より学徒動員となり、軍需工場へ行き、午前・学習、午後・実習として旋盤等を教えられた毎日であった。

空襲も次第に激しさを増し、曽根あたりの水田にも爆弾が落ち大きな穴が見受けられた。

夜は旧名古屋市内への焼夷弾による波状攻撃があり、最初の照明弾で明るく照らし出され、次第に炎による明るさに変わって行く夜空を呆然と眺めていた。

当時の食糧事情は、勿論配給制度で量は少なく、米のなかに「大豆カス・ヒジキ」等の入ったご飯、スイトン等、大部分が代用食であった。現在の北朝鮮の映像を見るたび、当時が思い出される。

戦況は急速に悪化し、戦死者や学徒でありながら空襲により、工場にて命を



落とす人等、身近にみられ、戦争に対する不安を感ずる事もあったが、軍国主義教育のせいか「最後に日本は勝つのだ」と信じての毎日であった。最近のオウム事件の様に洗脳されていたのだろうか？

又、東海地区は十九年十二月・二十年一月と二度にわたり、大空襲が襲い、人の心に大打撃を与えた。

多くの人が空襲で焼け出されて防空壕暮らしを余儀なくされ、都会のほとんどは跡形もない状態となった。

二十年八月六・九日と広島・長崎に原子爆弾が投下され、いよいよ日本の最後の日が近づいてきた。原子爆弾も新型爆弾とのみ放送され、当時戦争の真実はほとんど知らされなかった。

そして八月十五日、終戦の玉音放送を聞いた。雑音等で聞き取りにくかったが「戦争が終わった」と告げられた。

目標を失った者の哀れさ、一瞬にして物心両面にわたり、全てを剥ぎとられ

た様な気がした。しばらくの間どの様にして学業に就いたか記憶にない。

終戦直後、日本軍の飛行機が飛び、最後迄戦う決意をビラで告げていた。その後二・三日にして米軍機が飛来、終戦を知らせるビラをまいた。まじかに見て、両機の違いをまざまざと見せつけられた。

学校が再開されたが、全てが今迄と正反対、軍国主義が民主主義へ、敵国語（英語）が重要な科目へとかわった。

衣類・装飾品等、次から次へと食糧に変わっていった。世に言う「筍生活」である。

学校で農家の友達からヤミ米を分けてもらった事もあった。

世の中は、インフレによる新貨幣への切替え、外地からの復員、ヤミ市等、将来のことを考える暇もなく、「現在をどの様に生きるか」のみ考える毎日であった。

月日がたつにつれ、世の中も次第に落ち着き、もとの学生生活が戻ってきた。



当時は、塾があるわけでなく、勉強に、遊びにと楽しい学生生活がおくれたと思う。ただ常に空腹であったと記憶する。

戦後二・三年の間に、教育に関し制度・方針など大きな変化が訪れてきた。

六・三・三制の導入、男女共学、民主主義教育等進む中、旧制中学五年卒業と同時に新制高校三年編入（はじめて男女共学）と、目まぐるしい時を迎えた。

今、戦中・戦後を振り返って見ると、我々の学生時代は一度も修学旅行の経験はなかった。しかし、現在の教育とは違った良い面があったような気がする。

人間、いつの時代にも常に目標を持って、その達成にむけ努力する事が大切だと考える。

以上

# 終戦後の思い出

竹中　恵美子

私は、緑区鳴海町字下中で育ちました、六人兄弟の上から二番目です。

昭和二十二年、小学校六年生の時でした。授業でローマ字の勉強があり、今日勉強したこの続きが、明日勉強できることを楽しみにして帰宅すると、父親が明日は畑のいも掘り手伝いや弟の子守などで、学校を休んでくれと言われます。

楽しみにしていた学校を、又休むことが、とても残念でした。

食糧不足の時代でしたので、両親を恨むことはできなかった。夜寝床の中へ入って本をよく読んで勉強しましたが、自分で勉強することは難しかったです。

また中学校一年生の頃、新聞の朝刊を配りました。場所は、鳴海町字四本木



でした。ある冬の寒い雨の降った朝のことです。道路がまだ濡れていました。履物は兄が、わらを「つち」で打って作ってくれた藁草履（わらぞうり）を履いて、かけ走りで配るのです。配達途中にある、確か柘植さんのお婆さんが家の庭の掃除をしていました。

「毎朝ご苦労さま」と私のやぶれかけていた草履に気づいたのでしょう。玄関先に干してあった、まだ新しい草履を持って来て「足が冷たいでしょう。これを履いて行きなさい。」と言われて、本当に嬉しかった。今でも柘植さんの家の前を通ると、優しいお婆さんの顔が思い出されます。

時にはこわいおじいさんもいました。新聞がいつも最後になる家です。「新聞です。」と声をかけると、「遅いぞ、早く配って来い。」と怒鳴られたこともありました。

今は学校に行けるのに、行かない子がいるので、とても残念です。

# 雪国のB二十九爆撃機

須藤　和男

「ブーン」やがて「ゴー」・「キイーン」耳が裂けるかと思う程の轟音と、今にも吸い上げられそうな巨大な黒い塊が向かって来る。思わず、真白い雪の中に身を伏せた。大きな塊の米軍爆撃機B二十九は、頭上百メートル位の高さを通り過ぎて行った。

恐る恐る頭を持ち上げ、飛び去る米軍機を目で追った。その瞬間、十二キロメートル位先で大きな火柱が上がり、くろぐろと煙を上げて燃え上がった。

それは、今屋根の雪降しの為に屋根の雪の上にいた私の頭上を、爆音はげしく、低空で飛んで行った米軍爆撃機だった。あまり低空飛行だった為、一面白一色の地上の高低が感知出来ず、石狩川の堤防に突き当たったものと、後日聞



かされた。

その時私は小学校の二年生、恐いもの見たさと好奇心が手伝って次の日、七歳年上の兄と二人でスキーを履いて十二キロメートル先の飛行機の墜落現場へと向かった。

現場は惨たんたるもので、飛行機の形は無くばらばらに、燃えた鉄屑が散乱しているだけ、搭乗員がどうなったかは知るよしもない。近くの大人の人達が数人見に来ているだけで、私達の様な遠くからわざわざ来る物好きはいなかった様だ。

「もし、憲兵に見つかったら殺されるぞ」と言われ、二・三の部品を拾って（私達にとっては飛行機の部品というだけで初めて見る珍しいものであった。）急いで家に帰った。昭和二十年一月二十日と二十一日の出来事であった。

ここは北海道、石狩平野、石狩川から十二キロメートル程内陸側へ入ったひろびろとした農耕地帯である。

冬の北海道は、当時積雪量も多く二メートル位は積もる。家屋は屋根に一メートル位も雪が積もった儘置くと、重みで潰れる事があるので、必ず雪を除かねばならない。この作業を「屋根の雪降し」と言う。屋根の雪を降ろすと殆ど家が雪に埋まった様に見えるのは珍しい事ではない。

白一色の平野に家屋の一部が黒く点在して見えるだけの攻撃に値しないであろう地域に住んでいた私は、本当の恐ろしさを知らない。

北海道も、函館・室蘭・苫小牧・札幌・旭川・帯広・釧路・網走等の製鉄所・製紙工場・製油所・大きな橋・鉄橋等は壊滅状態になった。住む所・着る物・食べる物が全く無くなり、生きていても悲惨な状態の中、昭和二十年二月から、国鉄旭川局管轄内の鉄道郵便車に乗務していた私の兄も、日に一度のイモ等の食べ物があればいい方であり、更に、鉄橋を通過する列車を攻撃され、列車の最後部の郵便車が渡り切ると同時に橋が落下して、命だけは助かったと言う。この戦火の中に飢えと危険を分かっており乍ら、乗務させておけないと再



三家に帰る様に連絡を取っていた両親。

昭和二十年九月、その時は既に敗戦、米軍の管理下におかれ、自由な行動は取れない状態である中、なんとか無事に親元へ帰って来た、と最近になって食べ物が無いひもじさと、爆撃の恐ろしさを、当時を思い出し乍ら語ってくれた。

私は今から五十一年前の部分的な記憶を辿って見て、戦争体験層にいながら、戦争を知らない空間に位置しており、なんと幸せ者だったのか、と今更乍ら感じ入っている所である。

# 戦争体験を心に

阪野　美雪

昭和二年生まれの私にとっては、物心のついた頃から、昭和二十年の終戦まで、ずっと戦争の中で生きてきたと言っても過言ではありません。

昭和六年九月、満州事変が起きましたが、私には何んの記憶もありません。昭和十二年七月七日、支那事変（日中戦争）小学校四年のことでした。朝礼で校長先生から、戦争の話を聞き、幼いながらも不安と緊張、恐怖で胸がいっぱいになったことは今でもはっきりと覚えています。

当時、小学校では給食などないので、弁当といっても今のように空揚げやデザートなどはなく、さつまいもや、梅干しだけの日の丸弁当がほとんどでした。また、弁当を持ってこられない子も数人おり、運動場のすみでポツンとしていたようです。なにかかわいそうに見えました。私は家が近く、昼食は帰ったのです。急いで食べ、麦や籾（もみ）の干してある時期には手捌（てさば）きし、学校へ戻るのでした。午後の授業が終わると、すぐ家に帰り、むしろかぶせをするのが農家の子どもの仕事だったのです。父は会社勤め、母は農業、一番上の兄は飲食店に奉公、二番目の兄は北朝鮮へ奉公に行っていましたが、戦争が激しくなり、家へ帰ってきました。昭和十五年六月、三番目の兄に、「甲種合格」の知らせと同時、海軍呉入隊の通知が届きました。お国のためにと学んできた私にとって此の知らせは本当に嬉しいものでした。すぐ親戚が集まり、祝杯をあげ、みんなで兄を送り出しました。

やがて、昭和十六年十二月八日、真珠湾にて大東亜戦争（第二次世界大戦）が始まったのです。国民学校高等科二年だった私達は、高学年として、低学年の世話はもちろん、豚当番もしなければならない毎日でした。

支那事変が始まってから、私達は毎朝六時に氏神様にお参りするようになり

ました。婦人会の人は暇を見つけて近所をまわり、千人針（寅年の方は年の数、他の方は一針だけ縫い、出征する兵隊さんの腹巻にする）を頼みにみえました。千人針は、何十人、何百人の方々が縫わなければならないのです。女性の愛情印として、また「武運長久」の願いでもあったようです。とにかく勝ちたい、勝たなければならないという思いで必死でした。

年が明け、昭和十七年になり、進路のことを考えるようになりました。女学校へ進学したいという思いもありましたが、家のことを考えると難しいということも分かっていました。母から「女学校へ行かせてやりたいが、いつ兄達に召集令状が来るか知れない。鳴海の青年学校なら、都合の悪いときは休めるから。」と勧められました。お米、豆等で交換した布でセーラー服、モンペを自分で仕立て、青年学校に入学しました。間も過ぎると次男、四男、六男の兄に、日月は変わっていましたが召集が入り、家庭を持っている長男が居残って父母の相談相手となり、励ましてくれました。



本科から研究科に進む頃、名古屋にも空襲警報が入るようになり、進学では自分の身の安全を考えなければなりませんでした。母とそのことを考えていた矢先、二番目の兄嫁が郷里の信州で出産、子どもは無事でしたが、兄嫁は産後の肥立ちが悪く、他界してしまったのです。兄は二度目の召集を受けて留守中、父と私で赤ちゃんの着替えなどを持ち、夜行列車で長野の小諸迄行き、バスにて実家迄進みました。幸い赤ちゃんは細いなりに叔母に山羊乳をもらい、元気にいました。義姉の葬儀をすませ、子どもと嫁の位牌を持ち、名古屋に帰り養育することにしました。学校から帰るとすぐ子守をするのが毎日の日課でした。

昭和十九年十二月には大地震がありました。私も五人いました兄は四人兵隊に送られたのです。うち二人は戦死、二人は終戦と同時に帰宅しました。

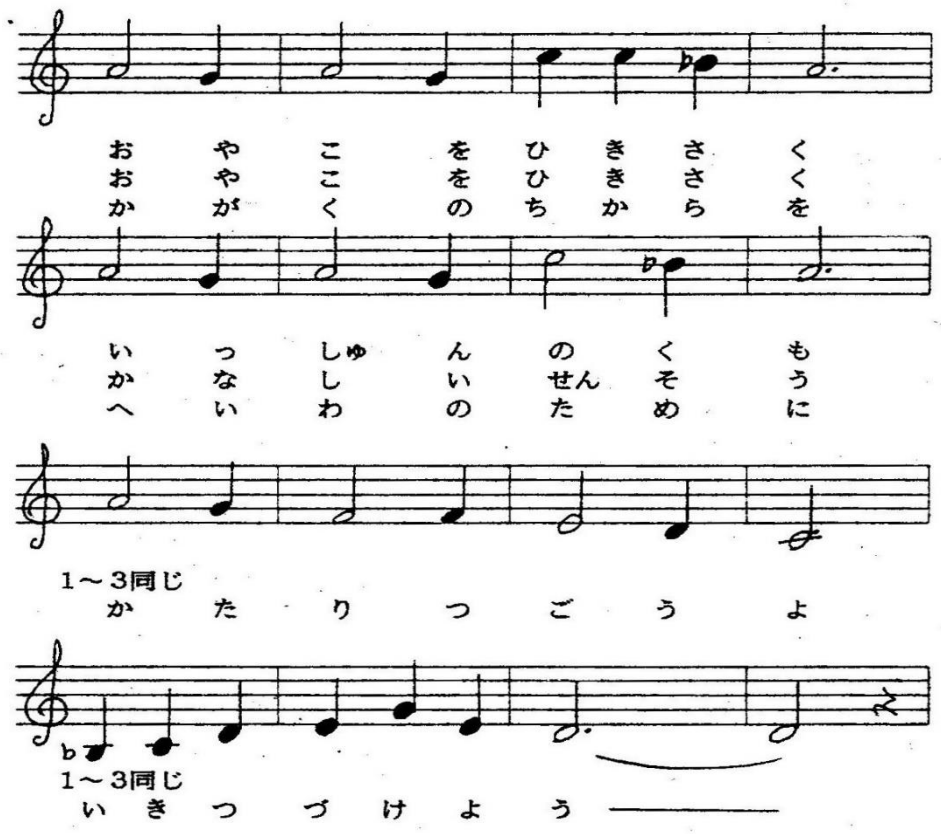
私の今住んでいる古鳴海は昭和二十年三月、五月、六月に空襲に遭い、とくに焼夷弾、爆弾が落とされたので部落の八割程度が焼失、爆撃にて家屋はなくなり、終戦後に建て替えられたのです。もう五十年にもなり町内の方々も若い

方に随分かわりましたが、昔からの本家は先祖の励ましの言葉に努力を残し過ぎ去った方が多く、私にも感ずるのです。

戦後の復興は目ざましく、戦争の傷跡はほとんど見られないくらいです。しかし戦争で家族を失った人達の心は、永遠に癒（いや）されることないでしょう。

今、私達は何んの不安もなく、楽しい生活をあたりまえと思ってしまいがちですが、あの忌（いま）わしい戦争があったということを忘れないで欲しいと思います。

そして未来を担うあなた達がいつまでも平和を大切にして、強いからだにきたえて下さい。私、七十才になろうとしている気持ちは、何時迄もわすれずがんばります。



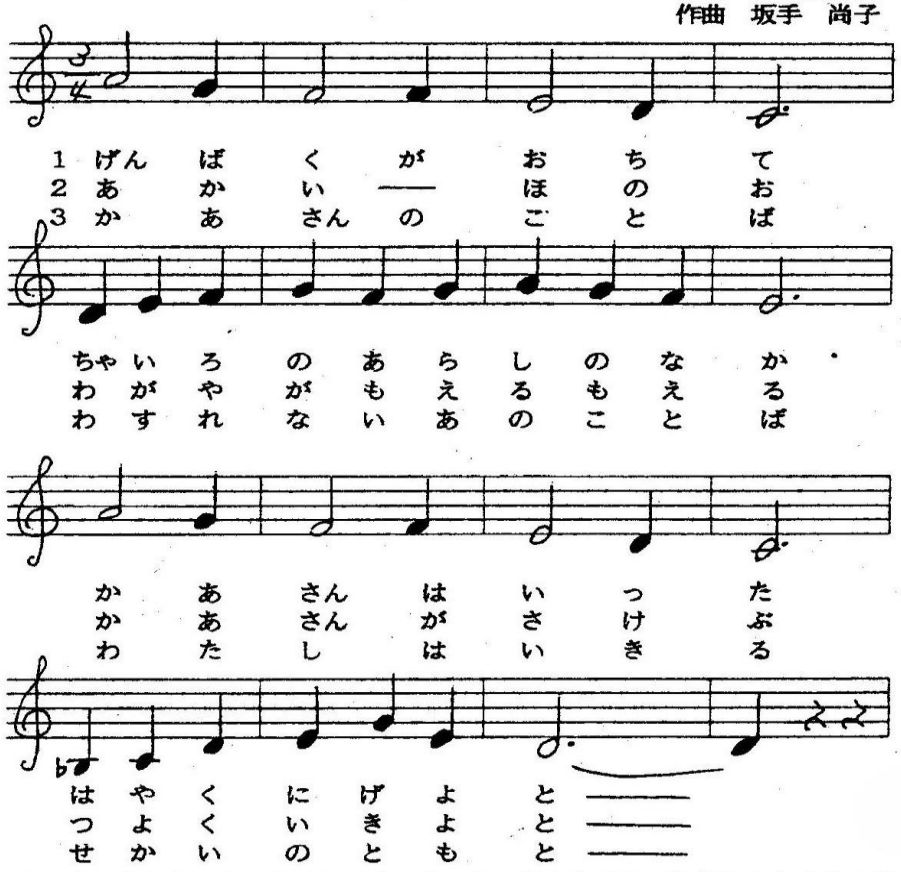

《ごめんなさい
おかあさん》
（子どもたちと
歌いたいうた・歌詞）

一．原爆が落ちて
茶色の嵐の中
かあさんは言った
早く逃げよと
親子を引き裂く
一瞬の雲
語り継ごうよ
生き続けよう



戦争体験の歌
《ごめんなさいお母さん》

作詞　実行委員会
作曲　坂手　尚子




二．赤い炎
我が家が燃える燃える
かあさんが叫ぶ
強く生きよと
親子を引き裂く
悲しい　戦争
語り継ごうよ
生き続けよう

三．かあさんの言葉
忘れないあの言葉
私は生きる
世界の友と
科学の力を
平和のために
語り継ごうよ
生き続けよう

## 【編集後記】

尽くし難くも辛い「体験記」を寄せて下さった執筆者の皆さま、および本「記録集」の作成にご協力いただいた関係者の方々に、心からの敬意と感謝の意を表させていただきます。

《題：いくさのひ・いのちのひ》

秘（ひ）そやかな
わか紫陽花（あじさい）の
かたはらの
火垂（ほた）るの墓（はか）よ
何（なに）を言（い）ひたきぞ

（編集者一同）

緑区民の戦時体験記録集（第四集）

編集・・・第九回戦争体験を語り継ぐ集い実行委員会

印刷・発行・・・名古屋市緑生涯学習センター

発行年月日・・・一九九七年七月一九日（土）

（戦火のなかの子どもたち より）

岩崎ちひろ・作